《何が「甘い」のか》

——東大闘争１周年をむかえて——

上野昂志

どんな問題であろうとも、何事が起ころうとも、一番安全で得をするのは、それらをちらっと横目で眺めて「甘いねえ」とつぶやくことだろう。「甘い」なんて言われると、言われた人間はシャクだから自分の甘くないことを必死に抗弁しようとは思うものの、ムキになればなるほど己れの「野暮ったさ」をむきだしにすることになるので、精々「何いってやがんでぇ」と捨ゼリフのひとつも吐いて、渋面を作ってそっぽを向く位しかできない。それだけ言った方の人間の株は上がって、「酸いも甘いもかみわけた」いきな人のように見えるし、九鬼周造にならって言うならば、その「いき」も通り越した「渋い」人にさえ見えるかもしれない。つまり、人を嘲けりながら、そのことによって復讐を受ける心配がないばかりか、結構人生の裏表を眺めてきた苦労人に見られるというオマケまでつくのだからやめられない。そういう類の「渋好み」が大学にたてこもって闘う学生を眺めるとこういうことになる。

　もしも、モスクワ大学の塔を、体制打倒を叫ぶ大学生が占拠し、正門に毛沢東の肖像をかかげたらどうなるだろう。チェコ侵入のときどころではあるまい。たちまち戦車が出動してじゅうりんし、学生は反革命のかどで死刑くらいに処せられるだろう。米国なら、社会秩序の重大な破壊として、警官隊は発砲するだろうし、フランスなら、警官隊は手荒いところを見せるだろう。さいわいにして、わが日本は現在、世界一の民主国家である。機動隊は、双方に死傷者が出ないことを第一に念じ、ゆっくり排除にかかる。（朝日新聞1月20日天声人語）

もしも、モスクワで学生が闘って死刑にされたら、真先に「天声人語」が、「社会主義国の非人道性」非難の金切り声をあげるだろうし、もしアメリカで警官隊が発砲するような事になれば、その時は学生の手にも銃が握られているはずである。ま、そんな事はどうでもいいが、機動隊と闘う学生がそれほど「甘い」ものに見えるなら、夫子自ら、この「世界一の民主国家」の機動隊とぶつかって「規制」されてみてはどうか。ガス弾でもくらって眼球をえぐりとられでもしたら、その「甘さ」もたっぷり味わえるのではなかろうか。つまり、「苦労人」になるのも、「苦労人」を気取るほど楽じゃないってことだ。

　こんな事を言ってみてもはじまらないが、ただ滑稽なのは、「渋好み」を気取って他人を「甘い」と非難するものに限って、己れ自身の甘さに対しては全く無自覚なことである。彼らは、人が殺されないでいると、「許されているのをいいことにして甘えている」などと非難するが、そのような非難こそ「許され」「甘やかされ」ていることには気付かないという二重の「甘さ」に浸っているのである。しかし、現在学生を「甘い」ということの裏には、単にそれを言う人間の「甘さ」があるだけでなく、自らの「甘さ」を支える根拠が脅かされつつあることに対する恐怖もある。自分を保護してくれる秩序が失われれば「甘い」などと言っていられなくなる、そこで敵を斜めに眺めて「甘い」という、つまり自分の「甘さ」の中に組み入れてしまおうというわけだ。

　こういう人間は角材で殴りとばされれば、あるいは間違って

警棒でこづかれれば、少しは「甘さ」が抜けるだろうか、どうだかあやしいものだという以外にない。被害者意識を精いっぱいつのらせるのが関の山、という感じがする。たとえば、1月22日の新聞には「教官と学生が仲よく」という見出しで次のような記事が載っている。

「先生かっこいいな」――ヘルメットをかぶった教官を学生が冷やかす。「きみたちいままで掃除をしたこともないくせに、きょうは張切ってるじゃないか」教官負けずに学生をやり返す。その言葉のはしばしに、これまでの東大では見られなかった明るさがのぞく。東京・駒場、東大教養学部。二十一日、ろう城占拠していた反代々木系学生が去ると、教官、学生約三百人はさっそく荒れた第八本館と周辺の跡片付けをはじめた。（朝日新聞）

闘争の時何処にいて、何を考えていたかは知らないが、「跡片づけ」にはヘルメットをかぶって出てくる教師と学生の歯の浮くように甘ったれた会話が示しているのは、べったりした自己肯定でしかないが、それは生活者の端的なエゴイズムというものではない。大学がつぶれてしまったら食っていけなくなるからつぶしたくないという風には、エゴイズムがむきだしにはあらわれないで、まだ「学問」あるいは「大学」という幻想にくるまれたままなのだ。それ故それは、よくはないけど食うためにはどうしようもないという端的なエゴイズムのもつ否定性にさえ辿りつくことなく、逆に、自己保存の願望を「学問」という大義名分に不断に解消させていくために、終に自らの存在を凝視することがない。そこでは、今度の闘争も、自然の災害のように外から自分を襲ってくるものとしてしか見えないのである。機動隊による弾圧を行わせるにあたっての大学の言い草「時計台に武装してたてこもっているのは、学園の問題とは関係ないことだ、だから警察の手を借りて排除するのは当然」に見られる論理は、官僚の得意とするスリカエ論だが、そのような論理を不断に生みだすのが、自らがその内部において問われていることを外側に置き換えることによって、問題からすり抜けていく自己保存の思想にほかならない。

ところで、昨年3月の医学部不当処分追求の場で、何を血迷ったか「大河内を守れ」という叫びをあげて以来、ひとつひとつあげればきりないが、「四項目要求」を出したりひっこめたりしてる連中がいる。11月には、1月以来の闘争における追加処分の撤回、青医連の団交権というそれまでの要求までとり下げ、今年1月10日の「七学部集会」については、当日の昼過ぎまで「執行部の一方的提案」と弾劾していながら、その舌の根が乾かぬうちに集会参加を呼びかけ、集会後にはこれも既におなじみの、機動隊には一度も向けたことのない「民主化棒」をふるって本郷を襲った連中に一貫しているのも、無限の自己肯定でしかないが、ただそれの名分としているのが「学問」ではなく「革新」（時には「革命」）の旗印であることが違っているだけだ。大義名分が「学問」であったり「革新」であったりしても、彼らにおいてそれは、名分としてはっきりと自覚されているのではなく、未だ対象化されない幻想としてぴったりと貼りついているのだ。確かにそれは、一皮むけばエゴイズムという類のものなのだが、問題は、その一皮が貼りついているということにある。つまり、「学問」、「革新」という名分がヴェールとなって、己れのエゴイズムを自分の眼から隠し正当化するように働くと同時に、自らの存在の無限肯定の上に「学問」、「革新」が積み重ねられる。それ故、彼らが現在の体制に同化していくのは当然なのである。「民主化棒」をふるう「非暴力的組織」を学生が学内の機動隊と呼ぶのは、それが大学当局の自己保存の思想と同じ論理に立っているからにほかならない。

このような者たちが、恐らく一年前と全く同じ容貌で、今も「学園」を歩きまわっていることは疑いを得ない。だが、彼らをすっぽりとおおっていた擬制はほころびて、彼らはその姿を白昼に晒している。この者たちを更に執拗に問いつめていくこと、その意味で闘争は今始まったばかりなのだ。

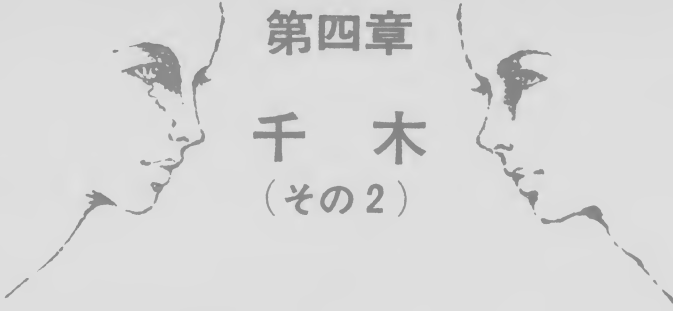
（69年1月29日）

日本忍法伝　第三部

新・日本書紀

第8回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第四章
千木
（その2）

（三）

日輪の丘――、人々はそう呼ぶ。

豊媛の新宮殿はまさに邪馬台国の東、太陽が何処よりも先に光の矢を射あてるところにあった。

その新宮殿は、今やほとんどその偉容を人々の前にあらわして、日の光に輝いている。

新宮殿を見上げるとき、人々は、それを作ったのは自分たちだということを忘れ、それがまるで、ある日、あの日輪から日のしずくと共にこの丘へふりそそいで来たものであるかの如く感じとり、朝に夕に新宮殿を眺めやっては歓声を発するのであった。

それは、かつて卑弥呼のいた頃の邪馬台国を知るものには、過去の栄光の再現とうつったことであろうし、また、その時代を知らぬ若者たちには、これから始まろうとする新たなる時代の、輝かしい予兆とも見えたにちがいない。

事実、日輪が、新しい日輪がこの国に天降ったあの日から、邪馬台国の人々にとってこれほど忙しい時の連続はなかったといっていい。なぜならばこの日輪の宮殿を作る仕事の他に、過去数十年に亘る掠奪とじゅうりんのため荒廃の極に達していた邪馬台国を、日輪の住むにふさわしい国に、よみがえらせるという仕事もあったからである。

が、忙しいということは、邪馬台国の人々にとって久しぶりにおとずれた「心の張りつめた季節」でもあった。きのうまでは侵略のためにしかこの国を訪れなかったまわりの国々が、おびただしい貢物や生口（奴隷）をつれて日輪に恭順を誓う姿は、その日輪がわれらのものだと思うだけに、何と「こころたのしい」みものであったことだろう。

日輪の丘へ通じる道――、それは広く広くつくられた。そしてその道が発する村々、すでにそこは数十、数百の家々が軒をつらねる立派な邪馬台国の首都として再生しつつあった。荒野もいまはみどり豊かな畑になっている。

邪馬台国にふたたび鳥のうたう日々がよみがえりつつあった。

だが、それは豊媛にとって何とい

うたいくつな日々のよみがえりであったことだろう。広い新宮殿にうつったその日から、豊媛が自らの手で為すべきことは何一つとしてなくなってしまった。すべては新宮殿にかしづく女たちがやってくれる。

豊媛の仕事は、寝ることと、様々の国からの使者が貢物をささげるとき、ただ遠い宮殿の奥でじっと眺めている、それだけになってしまった。使者たちに声一つかける必要はない。それは奈美彦と法麻呂がやってくれる。宮殿は数百人の女たちと、速瀬彦のひきいる兵士たちに守られている。そして女たちは美夜日によってかたいかたい結束を誓わせられている。いや、そんな「誓い」などなくても今の邪馬台国に、日輪に対し叛心を持つものなどひとりもいるわけはない。邪馬台国の人々は、この短かい日々のうちにかくもこの国が美事に復興しえたのはすべて日輪の力だと信じて疑わないのだから。

そういう「たいくつ」な日々の連続は、豊媛にいやがおうでもあの嵐のような暴力の一夜を想いかえさずにはおかない。出雲とよばれる生口たちに、次々と犯された夜――、そしてひとりだけ豊媛の肌には手をふれようともせず、出雲の海を走る天鳥船について語ってくれた若者の顔。それは「出雲」というまだ見ぬ国に対するあこがれと共に、豊媛の胸に熱い想いをこみ上げさせる。

そういえば、あの出雲の生口たちはその後どうしているだろうか。新宮殿が完成に近づいて、こうしてその奥深く住みつくようになってしまってからは、豊媛は表へ出ることはまったくかなわぬ身となってしまった。また表へ出ても、それは常に奈美彦と法麻呂につきそわれ、そのまわりを女たちがとりかこみ、さらにその前後を速瀬彦の兵士たちが守るという、「不自由」な身の上とはなりさがった。たまには共に遊びたい娘たちとも口をきくことはかなわず、まして、どこにいるのかしれぬ、他国の生口のことなど、どうして知ることができようか。

「美夜日」

豊媛は、いま直接声をかけることを許されている数少ない人間の一人の名を呼ぶ。この名のひととも、幼なかった頃とはちがい、いまは大きなへだたりができてしまっている。

「はい、媛」

美夜日の返事はいつも同じだ。

いま、豊媛は宮殿の奥で、素裸の姿を女たちの前に立たせている。女たちは、その豊媛をとりかこみ、泉の水で、静かに豊媛の肌をふいている。

美夜日は、まさにまぶしいものを見つめるように、その女たちの手もと、豊媛の裸形をみつめている。

「美夜日、そなたはいつもそうして私をみつめているが、どうじゃ、私の肉体に変化はないか」

「いいえ、媛様」

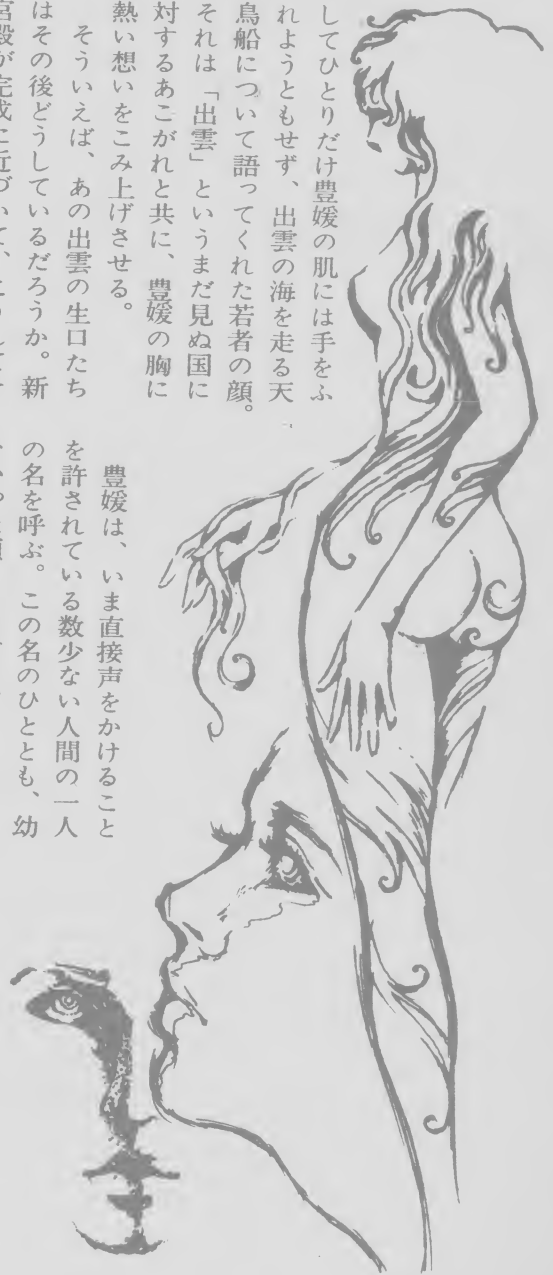
美夜日はあわててかぶりをふる。

「いつも、いつも、媛様の肌は日輪の如く輝いておられます」

「そうか」

そのあと、「うそであろう」とも「変ったはずじゃ」ともつけ加えたいと思う。この「日輪のように輝く肌」は、実はお前たちがさげすんでいる北の蛮人、出雲の生口共に犯された肌なのだ。

「教えてほしいことがある」

「はい、媛様」

「女は、いや女の肌は男を知ると変化すると聞くが、まことか、美夜日」
「……」
美夜日は答えず、一瞬おどろいたように豊媛をみつめたが、急にうろたえたように女たちを追いたてると、あわてて豊媛に鹿の毛布をかぶせるようにして着せた。
「どうなのじゃ、美夜日」
「媛……」
美夜日は、豊媛の前にひざまづく。
「お許し下さい。私は、そのようなことについては存じておりません」
もういちど、うそおつき！　といいたい。不耶彦の腕の中で我を忘れたお前の姿、私は忘れてはいないぞ、美夜日……。
「媛、誰がそのようなことをいいましたのでしょうか。おそらくはバカな小娘たちのつまらぬ噂話。媛、媛は日輪。この世に媛ひとりしか存在せぬ日輪でございます。どうか、男などという言葉はお忘れ下さいまし」
そうか、私は日輪だった。まさに、この世にひとりしかない存在である。とつぜんおかしさがこみ上げる。この世に私ひとり。そのおかしさは豊媛にとって滑稽さであると同時に自嘲でもまたあった。

（四）

新宮殿の最後の仕上げがつづけられている。
そんなある日、その日もまた日輪の丘を朝日が照らした。その旭日の中に、邪馬台国の人々は見た！
新宮殿の屋根に、異様な柱がとりつけられているのだ。
それは、屋根の勾配とクロスするかたちで二本の柱が十字をつくって、それぞれ斜めに天を衝いてそびえているのであった。
巨大な柱であった。いつ、誰が、とりつけたのか。
いや、おそらく作業は昨夜のうちに行なわれたにちがいない。
天を衝く二本の柱は、朝日の光にくっきりと青空にそびえた。
それは、新宮殿の高さを二倍にも、三倍にも高く、大きく見せるかのように見えた。しかし、こんな奇妙な柱は、邪馬台国の誰も見たことがなかった。
丘の下から、新宮殿へつづく道へ、人々は集まる。
「誰だ！　宮殿にいたずらした奴は」
「われらが日輪をけがす者は誰だ」
「しかし、宮殿は、みろ、何と生き生きと見えるではないか」
「バカモノ、あれは異国の柱だ！　邪悪のしるしだ！」
「誰だ、誰がやったのだ」
「日輪がけがされたぞ！」
ざわめきは当然のことに新宮殿の中にまでつたわった。
女たちは、豊媛につかえるという職務も忘れてとび出していった。
そして豊媛も、いましずかに宮殿の表へ出る。
「媛、何ということを！」
あわてて奈美彦がおしとどめようとする。
「私にも見せておくれ、そのみたこともない、天を衝く柱を！」
「媛、あれはそなたを、日輪を汚そうとするやからのいやがらせでございます。お入りなさい」
「いやじゃ、私が汚されているのならなおのこと、そのやつらのたくらみをこの目でみとどけてやりたい。どけ！　奈美彦！」
豊媛は走り出す。
宮殿の前の男女は一斉に大地にすわった。
しかし、いつもはみんなひたいを大地にすりつけるのに、今日だけはちがった。大地に坐りながら、人々は空をみあげている。
豊媛もその視線を追って、新宮殿の屋根を見る。
とたん、豊媛はいい知れぬ感動をおぼえた。大空をくっきりと切り裂

いたようにして天にそびえる二本の柱。
　それはななめに、天をつき刺すが如く、それをつくったものの心の大いさを語るが如く、静かで、清冽な柱であった。
　そして、豊媛は何故かこれをやったのはあの出雲の生口たちではないかと、とつぜん思った。
　すると、その豊媛の心を裏づけるかのように、はるか、海岸の方から、あの音が、彼女の心をとらえてはなさぬあの音色がひびいて来たのである。
　コオオオン、コオオオン。
　それは銅鐸のひびきであった。
「奴だ！」
「出雲の生口だ！」
「奴らのしわざだ！」
　ざわめきは叫びにかわった！
「とらえろ！」
　奈美彦がどなった。
「とらえて殺せ！　日輪を汚した者は断じて許せぬ。行け！　邪馬台国の若者！」
　その声に法麻呂が立ち上がる。
「つづけ！」
　速瀬彦も叫んだ！
　と同時に、若者と兵士たちは一団となって丘をかけ下っていった。
「奈美彦」
　豊媛は静かにいう。
「はい」
「なぜ、とらえて殺す」
「今も申し上げたとおり、奴らは媛をけがしましたゆえ」
「そうかな、私はそうは思わぬ」
「何といわれます」
「よく見ろ、奈美彦！　あの二本の柱。私には、あの柱が、まるで私自身の腕のように思えます」
「媛！」
「そうじゃ、あれは私の腕！　私は日輪、その日輪が、両腕を大空へさしのべて、まことの日輪をかきいだこうとしているのじゃ」
「……」
「そうは見えぬか。二本の腕が天へのびる私の心を、いや邪馬台国の心をあらわしてああしてそびえている。な、奈美彦」
「……」
「私は、もしあれが出雲の生口共のしわざだとすれば彼らをとらえて殺すより、むしろ邪馬台国のために、いいえ、私自身のためにも彼らをほめてやりたいほどの……」
「おやめなされ！」
　奈美彦の声はするどかった。
「邪馬台国はただ一つ、日輪の天降った国です。異族の風習に屈しろといわれるのか！」
「……」
　抗弁しても無駄なことは、豊媛にはよくわかっている。私は日輪、この邪馬台国の支配者、しかし何一つ

自由はないのだ。

（五）

千木！

と呼んだと豊媛は女たちのことばの端々からさとった。

やはりあれをつくったのは出雲の生口たちであったのだ。彼らはあの柱を千木と呼んだという。

豊媛が、奈美彦にいったことばは嘘ではなかった。まるで太陽を抱こうとする二本の腕と見たのは真実である。それはあるいは、あの鳥のような速さで海を走るという「天鳥船」のイメージと結びついたものであるのかもしれなかった。

出雲の生口たちはとらえられ、あした殺されるという。

海岸に穴を掘り、その中へ生きうめにされるという。

とつぜん、豊媛は、あの天鳥船を見たいと思った。そして千木をいただく宮殿が、もしあるのなら、それも見たいと思った。だって私は日輪なんだもの。

その夜、女たちが寝しずまったころを見はからって豊媛はそっと新宮殿をぬけ出して、出雲の生口たちがとらえられている土牢へしのびこんだ。

「殺しに来たのか、もう」

男の声が暗い中でひびいた。

「ちがう」

「ほう、女だな」

「日輪です」

男たちの間に笑い声が起こった。

「きけ、出雲の生口！」

「何しに来た邪馬台の日輪」

「たのみがある」

「あした日の出と共に殺されるおれたちにたのみか」

「もし、私が、そなたたちをここから助け出したら」

「……」

「私を、そなたたちの国、出雲へつれていってくれるか」

一瞬、男たちは息をのんだ。

「どうじゃ」

「いいとも」

答えたのはあの若者の声であった。

豊媛はすばやくかくしもった短剣で、牢のつたを切りはらった。

「さ、早く！」

次の瞬間、男たちは、豊媛をつきとばすようにして走った。

「何をする！」

「だまされたな、日輪！　さらばだ！」

どどっと男たちは走った。

「まって！」

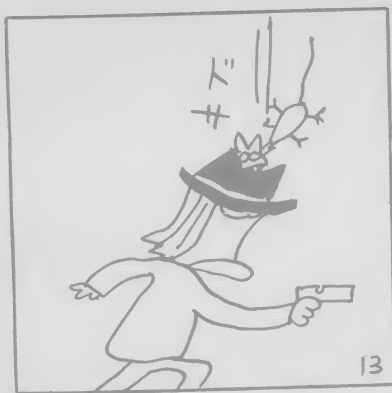
はねおきると豊媛は男たちを追った。

だまされた、この私が！
そんなバカな、この世に日輪をあざむく奴がいてたまろうか！
いつか、まさに日輪としての心をもつ自分に豊媛は気づく。
しかし、今は必死だ。
男たちのあとを追って、走る、走る。
ざわめきがおこった。
「日輪がいない」
「出雲の生口どももにげたぞ！」
追手が迫った。
その追手の中に豊媛は速瀬彦の顔をみる。
ふと速瀬彦にたのんでみようかと思う。がそれは所詮望みのないことだ。今はただひたすら走るだけだ。
だが、追手は後からだけではなかった。前からも、左からも来た。
そして、一人、また一人、出雲の生口たちは矢を槍をうけて倒れていく。
豊媛は無我夢中でそばの葦のしげみへとびこむ。
とたん、つよい力でむんずと抱きすくめられた。
「あなたは……」
それはあの若者だった。
「日輪か。よし、お前の命と、おれの命、奴らの前にどちらを選ぶかためしてやる！
若者は、豊媛のきき腕をねじ上げると速瀬彦の前へおどり出ようとした。
「まちなさい」
「何！」
「この葦原の向こうに、たしか船があるはず」
「まことか」
豊媛はうなずく。
「私も一緒につれていってくれますか」
「よし、こい」
若者は今度は豊媛の手をひいて走った。
葦原をぬけたところに、海があった。
そこに葦原にかくれるようにして一そうの船がある。
「天鳥船には及ばぬかもしれぬが……」
「道案内、ごくろう」
ここまで来て若者はもう一度、豊媛をつきとばすと船にとびのった！
「卑法者！」
「さらば」
船の上で若者は白い歯を見せて笑った。
「叫んでもよいのか」
「なんだと」
「出雲の生口がにげると、叫んでもよいのか」
「アハハハハ」
と若者は明るく笑った。
「負けたよ、来い」
手をさしのべる。
豊媛はザブと海にとびこみ、すでにこぎ出していた船めがけておよいだ。
ようやく、太陽がのぼりはじめている。
その光の中で、豊媛はぬれた衣服のまま、若者の腕によりかかっていた。
「日輪……」
「いいえ、私は豊、豊と呼んで下さい」
「トヨか……、おれは玉依彦だ」
豊媛は玉依彦の腕の中で目を閉じた。
船は、潮にのって流れはじめていた。

（つづく）

今月の本棚

砂川しげひさ漫画選集
ミスター・プロフェッショナル

「きさま　それでもプロフェッショナルか！」　ボスにどなりとばされたサブやんは、目にいっぱいの涙をうかべピストル片手に闇の街へと消えていく。やりとげるまでやってみせるとタンカをきった手まえあとにはひけず、人からしつっこいねといわれようがどうだろうがズンズン進む、そしてご存知ダンマリ直接行動の展開とあいなる。サー、ズドン、ドサ。プシュ、ドン、チャリーン。ビョーン、バビューン、シーン。擬音の使いわけではだれにもひけをとらない砂川ナンセンス・マンガの妙味ここに極まれり。

「ミスター　プロフェッショナル」のほか「めっかち右膳」「サラリーマン武士道」「ホシとデカ」「ふくめん君」など昨年一年間に各種マンガ雑誌に発表したなかから選んだもの。作品のはしはしに砂川氏の才智があふれ、見る者を感嘆させずにはおかない。ちなみに砂川氏は昭和16年生れ。

▽四八〇円・漫画社刊

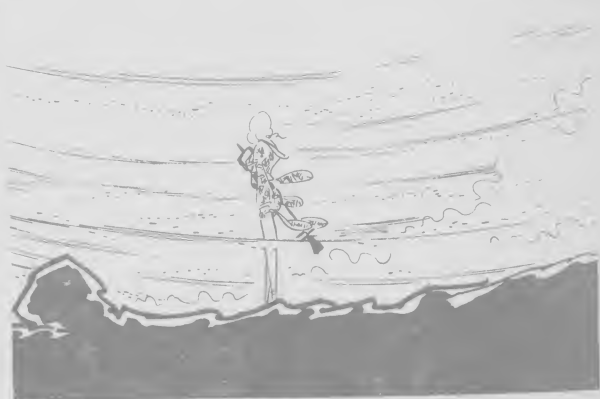
竹内　健著
薔薇の悪魔

「カサッ！」

あの無気味な音がした。と見るまに、床に倒れた少女が烏賊のように大きくそり返った。少女の唇が開いた。大きく開いた。さらに大きく……耳もとまで。少女の瞳も開いた。耳がふるえた。バリバリ……少女の口が裂け、鼻孔が裂け、耳が裂けた。

そして、その破れた穴から、少女の体のあちこちから、数万数千のおびただしいクモが、一気に飛び出した。カサカサ、カサカサ……

――黄色の虫・幻想黙示録第三章――

空の色さえ陽気な楽しい五月に、美しい少女はこうして少年の目の前で消えていった。『薔薇の悪魔――世界でいちばんコワイ話』は、薔薇色のプロローグからはじまり、赤色の鳥、青色の船、黄色の虫、銀色の海、紫色の丘、藍色の沼の六章からなり、黒色のエピローグでしめくくられている。

「藍の中を泳いでいるんだ、ボクは！

少年は深く沈んでいきながら、ほとんど有頂天になっていた。

沼の底までもぐった少年は、沼の底に生えている樹々が、中央の一個所だけポッカリあいているのに気がついた。そこは、まるで藍の森の空地だった。が、その空地に近づいた時、少年は空地と見えたそこが、実は沼の底ではなく、もう一つの別の底につながる入口であることを発見した。（中略）少年はさらにもぐった。するとまた沼があり、また藍色の樹々があった。

ただ、そうやって次から次へと沼を下っていく……」

藍色の底なし沼の奥深くとけ込んでいく少年。決して飽くことを知らない少年の、未知なる世界への幻想の旅。少年のゆくてには、どんな色のどんな世界が待ちうけているのだろうか。

▽三八〇円・新書館

棚下照生
女侠無宿

棚下照生とその一味が描くところの股旅の世界。といっても主人公はすべて女。お香、お蝶、お袖といった女たちがヤクザの世界に足を踏み入れざるをえなかったのは、お定まりの「男ゆえ」なのだ。男を愛しすぎ、信じすぎたがゆえに彼女たちは身をもちくずし、ヤクザにならねばならなかった。まあ、ヤクザ・メロドラマにすぎないといってしまえばそれまでであろう。が、そう簡単に割り切れないところに棚下マンガの持味がある。

男と女の愛と憎しみなんていったメロドラマの主要素を切りすててしまってもまだ何かが残ってしまうのが棚下マンガである。

「うしろで男の呼ぶ声がした　待ってくれろと泣く声がした――この秋声が過ぎ去るともうすぐ冷たい冬が来る　旅に苦手な冬が来る」　正調棚下節が切々と読者の胸にうったえかける。

▽二四〇円・朝日ソノラマ刊